

青年の生活意識に関する一研究

村 田 義 幸

A Study of Adolescent Views of the "Way to Live".

Yoshiyuki MURATA

目 的

若者の意識や行動は、大人からは批判的に見られるのが常である。近年、「新人類」とか「異星人」、「モラトリアム人間」などの言葉が流行し、現代青年の、以前の青年や現代の大人との差異性が強調されている。

青年の生活意識や価値観に関する研究としては、Spranger, E. (1914) や Morris, C. (1956) の価値類型論に基づく研究がよく知られている。

Allport, G. W., Vernon, P. H. & Lindzey, G. (1951) の価値尺度と同一形式の質問紙を高校生を対象に実施した加藤ら (1958) は、日本の男子高校生には理論型、経済型、権力型が多く、他方、女子では審美型、社会型、宗教型が多いことを明らかにしている。また、狩野 (1967) は、大学新入生を対象に、同様の調査を行ない、全体の傾向として理論型、権力型、審美型、社会型の順に価値類型が選択されていることを報告している。しかし、感覚的な価値観、ご都合主義的な、また快楽主義的な人生観に従って生きている人々を認めない Spranger の価値類型に基盤を置く Allport-Vernon 価値尺度を現代青年の価値観を測定する用具とするのは時代遅れであるという批判 (都留ら, 1975) は、現代青年の特徴を端的に示しているとも言えるであろう。

安藤 (1965) は Morris (1956) の5つの文化サンプルに、自分自身で収集したフィリピンと1964年の日本のサンプルを加え、7文化サンプル間の比較を行ない、各国の青年に比べて日本の青年 ('49) は慈愛型や中庸型、努力型といった生き方を志向していたが、1964年の調査では、アメリカの青年と同じ多彩型を志向する方向に変化していると報告している。

1970年代に入ると生活意識や人生観に関する因子分析的研究が多く現われた。例えば、西平 (1973) は高校生と大学生の人生態度を因子分析の手法を用いて研究し、人生観の構造として7因子を見出し、更にこれらの諸因子を検討して、信頼-不信、自己形成的-感性追求的という直交する2つの基底的な軸を想定し、理想主義的自己形成指向型、ナルシステックな自己追及型、ニヒリスティックな傍観者型、体験的(感性)快楽追及型の4つの人生態度の類型を設定している。また、村田 (1977) は、青木 (1970) の生き方について

ての44の質問項目を用い、男女大学生852名の各質問項目についての5段階評定値を基に因子分析を行ない、①積極的・社会中心主義、②消極的・享楽主義、③審美主義、④実利的・個人主義、⑤神秘主義の5因子を見出している。

その他、青年の価値観や人生観に関する研究は数多く行なわれているが、中学生、高校生、大学生といった青年だけを対象にした研究が多く、同一の質問項目または同一の測定尺度を用いて、様々な年齢の人々を対象とした研究は多くはない。青年（20～24歳）と中年（40～60歳）の伝統的生活習慣に対する意見およびに諺に対する考えの差を基に価値観の違いを調査した早坂（1971）の研究は貴重である。彼は、伝統的生活習慣に対する意見30項目中16項目、30の諺に対する考え方のうち10項目について青年と中年の間に有意な差異が見られはしたが、ヤングとオールドの世代間の価値観のズレは現実の違い以上にイメージとしてつくりだされているのではないかと結論づけている。

今回、15歳以上の青年や成人を対象とした調査に参画する機会を得た。そこで、価値観や人生観に関する質問項目を調査票の中に加え、同一尺度上で「生き方」に関する考え方の世代差の存在を検討し、日常生活に関する若者の意識や考え方を理解しようとした次第である。

方 法

1 調査で用いた質問項目

総務庁青少年対策本部（1986）の人生観等に関する調査事項（Q13～Q22）23項目を用いた（表3参照）。

2 調査の時期

平成元年7月6日～7月12日

3 調査対象

平成元年7月1日現在、15歳以上の男女で長崎市在住のものを対象とした。

長崎市の行政区域から調査区域として26町を無作為抽出し、住民基本台帳を用いて、1調査区域当たり14名、計364名を調査対象として無作為に抽出した。作齡別・性別標本構成および職業別構成は表1、表2のとおりである。

4 調査方法

調査対象者に対して戸別訪問により調査用紙を配布し、各対象者に回答を依頼した。後日、調査員が用紙を回収した。なお、個別に訪問する前に、対象者に対して、はがきによ

表1 年齢別・性別標本構成（人数と百分率）

	～20歳	20～29	30～39	40～49	50～59	60歳～	合 計	男女比
男 性	19名	16名	16名	21名	15名	16名	103名	34.6%
女 性	24名	25名	49名	52名	26名	19名	195名	65.4%
小 計	43名	41名	65名	73名	41名	35名	298名	
年 齢 化	14.4%	13.8%	21.8%	24.5%	13.8%	11.7%		100%

表2 職業別構成

()内は%

事務系	技術系	サービス系	労務系	学校の教師
30名 (10.1)	14名 (4.7)	24名 (8.1)	16名 (5.4)	9名 (3.0)
管理職	商工・自営	自由業	農水・専業	農水・兼業
4名 (1.3)	15名 (5.0)	6名 (2.0)	1名 (0.3)	0名 (0.0)
主婦・専業	主婦・兼業	学生	その他	無職
60名 (20.1)	32名 (10.7)	46名 (15.4)	13名 (4.4)	28名 (9.4)

り、調査の依頼をする旨連絡した。なお、このはがきは、調査員が、対象者を確実に訪問したことを確認するために、訪問時に対象者から受とるよう指示した。

5 回収率

標本数 364名、回収標本数 298名

回収率 81.8% (男子103/156=0.66, 女子194/208=0.95)

結 果

1 23の質問項目における回答状況

表1は、質問1の(A~L)12項目およびに質問2の(A~K)11項目計23項目について「あてはまる(そう思う)」、「ややあてはまる(ややそう思う)」、「あまりあてはまらない(あまりそう思わない)」およびに「あてはまらない(そう思わない)」の4段階評定の内、肯定的回答(あてはまる+ややあてはまる、または、そう思う+ややそう思う)の割合を「男女別」、「年齢別」およびに「全体」について示したもので、配列の順序は「全体」の百分率の高い順である。

(1) 全体の傾向

ア) 上位5位までを見ると、「世の中で一番大切なことは、みんなで力を合わせていくということだ」が92.6%で1位であり、この項目は、男女別、年齢層別に関係なく、全ての下位グループで1位となっている。また、「自分のことを考える前に他人のことを考えるべきだ」(77.2%)が5位に入っており、老若男女を問わず現代人は人の和や他人に対する思いやりを大切にする考えが強いことがわかる。

さらに、「多少の反対があっても良いことは断固実行すべきだ」(80.9%)、「自分の信念はできるかぎりつらぬくよう努力すべきだ」(77.9%)、「一生懸命に働けば必ず成功する」(77.5%)が2~4位を占め、自分の信念や努力を大切にする考えも強いことがわかる。

イ) 現代人は、個を大切にし、将来のことよりも現在を重視するといわれるが、「世間の目など気にせず、好きな人生を送るのがよい」(59.1%)、「将来のために努力するより、毎日の生活を楽しくやっていきたい」(58.4%)、「経済的に恵まれなくても、気ままに楽しく暮せればよい」(51.0%)と、半数以上の対象者がこのような考え方を支持している。

ウ) 「精神的に充実した生活より、経済的に豊かな生活のほうがよい」(47.0%)、「欲望

に忠実に生きるのが、人間的な生き方だ」(35.6%)などの回答状況にみられるように、物質至上主義、欲望優先の考え方を支持する人は多くない。

エ)「親は親、自分は自分で自由に生活しているほうだ」(47.0%)、「親が老いても、子供は独立した生活を送るのがよい」(43.6%)と、核家族化が進行している中であって、意識としては、必ずしも核家族化を是認してはいない人が半数以上存在している。

(2) 男女間の差異

ア)「多少の反対があっても良いことは断固実行すべきだ」は、男性92.2%に対し、女性72.8%と支持率に約10%の差異がある。信念や努力を大切に作る点では、男女共に一致しているが、波風を立てることに対する抵抗は女性に強いといえる。

イ) 男性と比較して女性の方が高い割合を示している項目を列挙すると、「自分の身なりや行動が、他人にどう見られているかを気にするほうだ」(男性50.5%、女性70.8%)「将来のために努力するよりは、毎日の生活を楽しくやっていきたい」(男性50.5%、女性67.7%)、「リーダーになって苦勞するよりは、のんきに人に従っている方が気楽でよい」(男性49.5%、女性68.2%)、「親は親、自分は自分で自由に生活している」(男性39.8%、女性50.8%)などであり、男性と比較して女性は、他人の目を意識しながらも、今現在の生活を気楽にエンジョイしているのである。

ウ)「自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが本当に人間的な生き方だ」という快樂主義的な考え方は、男女共に半数以下の支持率(男性49.5%、女性28.2%)ではあるが、男性は女性に比べると20%以上も支持率が高くなっている。「精神的に充実した生活より経済的に豊かな生活のほうがよい」(男性61.9%、女性45.1%)もかなり男性の方が高く、現実の生活はともあれ、快樂主義的な生き方に対する願望は男性の側に強いといえる。

(3) 年齢層間の比較

ア) 若年層の特徴：中年層や熟年層と比較して、29歳以下の若年層に顕著な特徴は、①「人生は、ひとりぼっちなのだから、他人をたのまず、自分で頑張るしかない」(若年56.0%、中年67.4%、熟年77.6%)と、仲間に対する依存期待が高いこと、②「自分の身なりや行動が、他人にどう見られるかを気にする」傾向(若年78.6%、中年63.0%、熟年51.3%)が大きい、③「家族のなかで、自分の気持ちを抑える」(若年39.3%、中年73.2%、熟年68.4%)ことは少ない、④「親は親、自分は自分で自由に生活している」(若年59.5%、中年48.9%、熟年31.6%)、⑤「少し無理だと思われる位の目標をたて頑張る」(若年41.7%、中年58.7%、熟年69.7%)傾向は小さく、要求水準が低い、⑥「新しいものを取り入れて、どんどん改革していく」(若年56.0%、中年42.2%、熟年42.1%)という進取の気持ちは強い、などである。

2E、2B、2Fの項目の回答状況に見られるように、信念と努力を大切に作る考え方が強い一方で、高年齢層の人と比較して、高い要求水準を設定して頑張ろうとする傾向の弱さ、自分の気持ちを大切にし、自由な生活を確保しようとする傾向の強さは、現代の若者の特徴を端的に表わしているといえるのではなかろうか。

イ)「自分の身なりや行動が、他人にどう見られているかを気にする」傾向は年齢の上昇とともに低下する。

ウ)「家族がうまくいくために、自分の気持ちを抑える」傾向は、中年層で一番強く、若年層では弱い。子供や年寄りに気を使いながら家族をまとめているのが中年層である。

エ)「気ままな楽しい暮らし」(若年54.8%, 中年42.8%, 熟年63.2%)を求める傾向は熟年層がもっとも強く, 中年層の支持率は半数を割っている。

オ)「親が老いても, 子どもは独立した生活を送るのがよい」という考えは, 50歳以上の熟年層の人々のうち半数が支持しているのに対し, 若年層(36.9%), 中年層(44.2%)では半数以下である。

表3 生活意識に関する男女間, 年齢層間の比較

(数値は%)

項目 番号	質 問 項 目	全 体	男女別		年齢層別		
			男 性	女 性	若 年 層	中 年 層	熟 年 層
2 G	世の中で一番大切なことは, 家族や仲間であつてみんなで仲良く力を合せていくということだ。	92.6	95.1	86.2	89.3	95.7	90.8
2 E	多少波風があつても, それを恐れては何もできない。多少の反対があつても, 良いことは断固実行すべきだ。	80.9	92.2	72.8	86.9	76.8	81.6
2 B	ものごとに妥協するのはもっともよくない。自分の信念はできるかぎりつらぬくよう努力すべきだ。	77.9	77.7	77.9	88.1	76.8	72.4
2 F	一生懸命に働けば, 必ず成功する。	77.5	77.7	77.4	86.9	74.6	72.4
1 F	自分のことを考える前に他人のことを考えるべきだ。	77.2	73.8	77.9	75.0	80.7	76.3
1 A	遊びでも仕事でも, やりだすとことん熱中して, まあまあのにするほうだ。	75.2	79.6	73.3	77.4	72.5	80.3
1 E	古いものは, 長い間ずっと受け継がれ残ってきたというよさがあるのだから, できるだけ残そうとするほうだ。	74.5	70.9	76.4	70.2	76.1	76.3
2 C	人生というものは, 結局一人ぼっちのものだから, 他人をたのまず, 自分で頑張るしかないのだ。	66.8	68.0	66.2	56.0	67.4	77.6
1 H	自分の身なりや行動が, 他人にどう見られるかを気にするほうだ。	63.8	50.5	70.8	78.6	63.0	51.3
1 C	家族がうまくいくためには, 自分の気持ちを抑えるほうだ。	62.4	65.0	61.0	39.3	73.2	68.4
1 J	自分は「狭く深く」型人間というよりは, 「広く浅く」型人間だ。	59.7	61.2	59.0	59.5	65.9	72.4
2 I	人や世間の目など気にせず, 好きな人生を送るのがよい。	59.1	65.0	55.9	65.5	56.5	56.6
1 G	将来のために努力するよりは, 毎日の生活を楽しくやっていきたい。	58.4	50.5	67.7	58.3	57.0	63.2
2 A	リーダーになって苦勞するよりは, のんきに人に従っているほうが気楽でよい。	57.7	49.5	68.2	50.0	59.4	60.5

表3 (続き)

1 D	少し無理だと思われる位の目標をたてて頑張るほうだ。	56.7	61.2	54.4	41.7	58.7	69.7
2 H	経済的に恵まれなくても、気ままに楽しく暮せればよい。	51.0	57.3	47.7	54.8	42.8	63.2
1 K	親は親、自分は自分で自由に生活しているほうだ。	47.0	39.8	50.8	59.5	48.9	31.6
2 D	精神的に充実した生活と経済的に豊かな生活とでは、経済的に豊かな生活のほうがよい。	47.0	61.9	45.1	40.5	49.3	65.8
1 I	できるだけ新しいものをとりいれて、どんどん改革していくほうだ。	45.6	51.5	42.6	56.0	42.2	42.1
2 K	親が老いても、子どもは独立した生活を送るのがよい。	43.6	44.7	43.1	36.9	44.2	50.0
1 L	良いものを買うよりも、旅行やコンサートなどの良い経験にお金を使いたい。	40.9	34.0	44.6	42.9	43.0	36.8
2 J	自分の欲望にできるだけ忠実に生きるのが本当に人間的に生き方だ。	35.6	49.5	28.2	40.5	31.9	36.8
1 B	小さい頃から、お山の大将になるのが好きなほうだった。	28.2	36.9	23.6	29.8	29.0	25.0

2 基本的価値観スケール得点の比較

総務庁青少年対策本部(1986)は、19歳～28歳の男女3,285人を対象に「現代青年生活志向に関する研究調査」を行ない、人生観等に関する調査項目の分析から基本的価値観スケールの構成とタイプの設定を行なっている。

総務庁青少年対策本部(1986)では、表3に示す23の質問項目に対する4段階評定値を基に因子分析を行ない、4つの因子を抽出している。第1因子(積極性因子)、第2因子(自己充足因子)、第3因子(努力・信念因子)、第4因子(伝統志向因子)の4つである。そして、このうち第1、第2、第4の因子に基づいて、それぞれに対応したスケールを構成し、現代青年の価値観の理解を試みているのである。

今回の調査結果の分析においても、総務庁青少年対策本部(1986)の分析結果をもとに、各基本的価値観タイプの比較を行なうことにした。

(1) 積極性スケールの比較

表3に示されている1A、1B、1D及びに2Aが積極性スケールを構成する質問項目である。各項目に対して、「あてはまる(そう思う)」と回答した場合は4点、「ややあてはまる(ややそう思う)」は3点、「あまりあてはまらない(あまりそう思わない)」は2点、「あてはまらない(そう思わない)」は1点を与える。ただし、2Aについては逆に粗点を与える(因子負荷量が-であるから)。従ってスケール得点は16点～4点の間に分布することになる。そして、16～12点が上位群、11点が中上位群、10～9点が中下位群、8～4点が下位群とタイプが設定されている。

本調査の有効回答者298名のうち、スケール構成項目に1つでもNA(無答)のある者8

名を除き、290名についてスケール得点を算出し、上記のタイプ設定の基準値を基に4タイプに分類した(表4)。

積極型(上位群)は、男性38.8%に対して女性20.3%と性差が顕著である。また、年齢層別では、積極型(上位群)及びに消極型(下位群)に顕著な差異は見られないものの、若年層で中上位群が(11.9%)と少なく、中下位群(41.7%)が多くなっている。

(2) 自己充足スケールの比較

表3における2H, 2I, 2Jの3項目が自己充足スケールの構成項目である。得点の与え方は積極性スケールと同様である。得点範囲は12~3点で、12~10が上位群、9~8点が中上位群、7~6中下位群、5~3が下位群である。

本調査の有効回答者290名のスケール得点を算出し、タイプ基準値に基づいて分類したのが表5である。自己不充足型(下位群)が男性に比べて女性に多いこと、年齢層別では、中年層に自己不充足型(下位群)が目立つことが注目される。

表4 生活意識の比較(積極性)

		〈積極性〉スケール							
		上位群・積極型		上 中 位 群		中 下 位 群		下位群・消極型	
全 体		77名	26.6%	52名	17.3%	93名	32.1%	68名	23.4%
男女別	男 性	38名	38.8%	17名	17.3%	27名	27.6%	16名	16.3%
	女 性	39名	20.3%	35名	18.2%	66名	34.4%	52名	27.1%
年齢層別	若 年 層	22名	26.2%	10名	11.9%	35名	41.7%	17名	20.2%
	中 年 層	35名	25.9%	26名	19.3%	37名	27.4%	37名	27.4%
	熟 年 層	20名	28.2%	16名	22.5%	21名	29.6%	14名	19.7%

(3) 伝統志向性スケールの比較

表3における1C, 1E, 1Fの3項目が伝統志向性スケールの構成項目である。得点範囲は12~3点で、12~10点が上位群、9点が中上位群、8~7点が中下位群、6~3点が下位群である。

有効回答者290名のスケール得点を算出し、タイプ基準値に基づいて分類した結果を表6に示す。男女間に顕著な差異は見られないが、年齢層別に見ると、年齢の上昇にとともに、伝統志向型の割合が増え、熟年層では52.1%に達している。逆に、若年層では中下位群が47.6%と半数近くを占めている。

表5に示す平均値(M)と標準偏差(SD)を基に、男女間および3つの年齢層相互間の平均値の差の統計的有意性を検討するためにt検定を行なった。その結果、性差については、積極性スケール(t=3.601, df=288, p<.01)と自己充足スケール(t=2.628, df=288, p<0.01)で統計的に有意な差異が認められ、いずれにおいても男性の方が女性よりも得点が大きくなっている。

表5 生活意識の比較（自己充足性）

		〈自己充足〉スケール							
		上位群 自己充足型		上 中 位 群		中 下 位 群		下位群 自己不充足型	
全 体		48名	16.6%	101名	34.8%	88名	30.3%	53名	18.3%
男女別	男 性	21名	21.4%	35名	35.7%	33名	33.7%	9名	9.2%
	女 性	27名	14.1%	66名	34.4%	55名	28.6%	44名	22.9%
年齢層別	若 年 層	13名	15.5%	36名	42.8%	26名	31.0%	9名	10.7%
	中 年 層	18名	13.3%	45名	33.3%	40名	29.6%	32名	23.7%
	熟 年 層	17名	23.9%	20名	28.2%	22名	31.0%	12名	16.9%

表6 生活意識の比較（伝統志向性）

		〈伝統志向〉スケール							
		上位群 伝統志向型		上 中 位 群		中 下 位 群		下位群 非伝統志向型	
全 体		107名	36.9%	69名	23.8%	90名	31.0%	24名	8.3%
男女別	男 性	36名	36.7%	21名	21.4%	30名	30.6%	11名	11.2%
	女 性	71名	37.0%	48名	25.0%	60名	31.3%	13名	6.8%
年齢層別	若 年 層	19名	22.6%	17名	20.2%	40名	47.6%	8名	9.5%
	中 年 層	51名	37.8%	39名	28.9%	35名	25.9%	10名	7.4%
	熟 年 層	37名	52.1%	13名	18.3%	15名	21.1%	6名	8.5%

3つの年齢層間の差異については、積極性スケールでは3年齢層の間に有意差は認められなかったが、自己充足スケールでは若年層と中年層の間 ($t = 2.407$, $df = 215$, $p < .02$) に、また、伝統志向スケールでは若年層と中年層 ($t = 2.44$, $df = 215$, $p < .02$)、若年層と熟年層の間 ($t = 3.619$, $df = 153$, $p < .001$) で統計的に有意な差異が認められた。

考 察

1 「生き方」の選択における傾向

対象者全体における肯定的回答の百分率上位5項目をみると、まず、家族や仲間との連帯を重視する生き方(2G)を肯定する者が極めて高い比率を示しており、性別、年齢層別のどのグループにおいても第1位となっている。その中でも、性別では男性、年齢層別では中年層の比率の高さが著しい。また、他人への配慮、思いやりの必要性を強調する意見も5位に入っており、暖かい人間関係を確保した生き方を求めているといえる。

(4) 各スケールの平均得点の比較

表7 積極性, 自己充足, 伝統志向性各スケール得点の平均と標準偏差

	積極性スケール		自己充足スケール		伝統志向性スケール	
	M	SD	M	SD	M	SD
全体	10.20	2.35	7.47	2.23	8.91	1.82
男性	10.88	2.50	7.95	2.13	8.80	1.94
女性	9.85	2.19	7.23	1.80	8.97	1.75
若年層	9.93	1.96	7.83	1.80	8.38	1.72
中年層	10.18	2.47	7.12	2.29	8.97	1.74
熟年層	10.51	2.31	7.73	2.45	9.44	1.90

信念や努力の大切さを強調する意見(2E, 2B, 2F)も多く支持を得、2~4位を占めていることも注目に値する。

都市化が進行し、物質的にも豊かになった今日、打算性・極度の個人主義・競争性・私秘性・無関心さなどの特徴に代表される都会人的パーソナリティをもつ人間が増加しているといわれる。事実、地域社会における人間関係が希薄になりつつあること、また、無気力な人間が増加していることなどが指摘されているが、そのような状況の中で連帯、努力や思いやりに満ちた生き方を求める人々が多いということは、現実の社会の中でそれらが欠けているということではなかろうか。

「精神的に充実した生活」よりも「経済的に豊かな生活」を選択する傾向は、全体では47%と半数を下回っているが、男子では61.9%、熟年層で65.8%と2/3近くの人が経済的に豊かな生活を志向している。その点女性(45.1%)や若年層(40.5%)と対照的である。しかし、男性や熟年層が物質至上・欲求優先の生き方を求めているのかといえば、そうでもないのである。項目2Jや2Hを肯定する比率を考慮すると、生活安定のための経済的基盤を確保した上で精神的に充実した生活を送りたいということではなかろうか。

2 基本的価値観スケール得点から見た傾向

(1) 積極性スケールの比較

表4にみられるように、全体としては、1/4強が積極型、1/4弱が消極型と両者の間に大差はないが、これに中上位群と中下位群を加える積極的傾向43.9%に対して、消極的傾向55.5%と消極型が優勢である。性別で見ると、男性積極的傾向が優勢であるのに対し、女性では消極的傾向が強くなっており、大きな性差が認められる。これは、平均積極性スケール得点の比較からも明らかである。近年、女性の社会進出は目覚ましく、積極的な女性の増加が指摘されている中、今回の調査ではその顕著な傾向は認められなかったが、今回の女性対象者のうち30歳代および40歳代の数の多さがこのような結果をもたらしたとも考えられる。

年齢層別では、若年層における消極的傾向(61.9%)の大きさと、平均積極性スケール

得点の比較(表7)では、統計的に有意な差異は認められなかったものの、年齢の上昇に伴う積極的傾向の増大が注目される(表4, 若年層38.1%, 中年層45.2%, 熟年層50.7%)。

(2) 自己充足性スケールの比較

表5, 表7に示すように、全体としては自己充足的傾向が自己不充足的傾向をわずかに上回って下り、男性では57.1%対42.9%, 年齢層別では若年層が58.3%対41.7%とかなりの差で自己充足的傾向が大きくなっている。平均スケール得点においても統計的に有意な差が認められる。女性よりも男性の方が、また、年配の人間よりも若者の方が、自分の欲望に忠実に、気ままに楽しく、好きな人生を送っているのである。逆に、年配者や女性は、家族や仲間へ気を配りながら、自己を抑え、自己犠牲的な生活を余儀なくされているのである。

(3) 伝統志向性スケールの比較

表6, 7から、全体として伝統志向的傾向が強くなり、この傾向に性差は認められない。また、年齢層別においては、若年層で伝統志向的傾向と非伝統志向的傾向の比率が逆転し、非伝統志向的傾向が優位になっているが、中年層, 熟年層共に伝統志向的傾向が大であり、この傾向は年齢の上昇につれて大きくなっている。

中年層や熟年層との比較からみた若者の特徴は、自己充足的傾向および非伝統志向的傾向が他の年齢層に比して強いということである。

青木(1970)は、大学生の価値類型として理想的達成主義, 享乐的自己主義, 利己的現実主義, 耽美的追及主義の4つを、また、村田(1977)は、積極的・社会中心主義, 消極的・享樂主義, 審美主義, 実利的・個人主義・神秘主義の5種類を、西平(1973)は高校生と大学生の人生観の構造として自己中心的因子・自己向上的因子, ニヒリズム因子など7因子を見出しているが、今日、青年の生活意識や生き方に対する考え方を問題にすると、自己充足的傾向, 個人主義的傾向を落すわけにはいかないであろう。

松原(1974)は、①若者文化は、通常、若者の「風俗」という形で表現される、②若者文化は青年世代の意識, 価値観や行動の象徴として表現された行動様式という特質をもつ、③若者文化は成人文化とは対照的であり、かつ非連続なものである、④現代の若者文化は、他の世代から期待されている文化あるいは行動様式ではない、⑤若者文化はユニークさや先駆性をもちながら、完結性をもちえないでいると、若者文化の特質について述べているが、若者文化が大人の文化や体制への対抗文化である以上、若年層に非伝統志向型が多くなるのも当然のことである。

参 考 文 献

- 青木孝悦 1970 大学生の価値類型について 心理学研究 41 2 83-89。
 Allport, G. W., Vernon, P. H. & Lindzey, G. 1951 Study of values. Boston: Houghton Mifflin.
 Ando, N. 1965 A cross-cultural study on value pattern of seven cultural samples. Psychologia 8. (見田宗介 1966 価値意識の理論 弘文堂より)
 加藤隆勝・島田一男 1958 価値態度に関する調査研究—オールポート, バーノン, リンゼイの〈価値の研究〉についての吟味— 日本心理学会第22回大会

- 狩野素郎 1967 大学生の価値観—その1— 厚生補導 15 36
総理府青少年対策本部 1986 現代青年の生活と価値観 大蔵省印刷局
早坂泰次郎 1971 現代の若者たち 日経新書 日本経済新聞社
松原治郎 1974 日本青年意識構造 弘文堂
Morris, C. 1956 Varieties of human value. Chicago: The University of Chicago Press.
村田義幸 1977 大学生の生活意識に関する研究 活水論文集 20 87-98

(1989年10月31日 受理)